

# SCHEDULE

東京都写真美術館展覧会スケジュール

2013	3階展示室	2階展示室	地下1階展示室	1階ホール
9				
10	「写真のエッセ」 コスモス 写された自然の形象 9月21日(土)～11月17日(日)		岩合光昭写真展 ネコライオン 8月10日(土)～10月20日(日)	『ドキュメンタリー映画 「もったいない!」』 9月21日(土)～10月11日(金)
11			写真新世紀東京展2013 10月26日(土)～11月17日(日)	
12		須田一政 風の片 9月28日(土)～12月1日(日)	第14回 上野彦馬賞 11月23日(土・祝)～12月1日(日)	「TRASHED～ゴミ地球の代償～」 10月12日(土)～10月18日(金)
2014	Photographie J H Lartigue (c)Ministère de la Culture - France / AAJHL		「Camera Lucida」2004年 高谷史郎 明るい部屋 12月10日(火)～1月26日(日)	東京・中国映画週間 10月19日(土)～10月23日(水)
1	植田正治と ジャック・アンリ・ラルティエーグ ー写真であそぶー 11月23日(土・祝)～1月26日(日)	日本の新進作家vol.12 路上から世界を変えていく 12月7日(土)～1月26日(日)		ショートショートフィルムフェス ティバル&アジア2013 10月24日(木)～10月27日(日)
2	第6回恵比寿映像祭 2月7日(金)～2月23日(日)			
3			APA展 3月1日(土)～3月16日(日)	
4	下岡蓮杖(仮称) 3月4日(火)～5月6日(火・休)	冠松次郎と穂刈三寿雄 ～黒部と槍～ 3月4日(火)～5月6日(火・休)	ロバート・キャバ(仮称) 3月22日(土)～5月11日(日)	「疎開した40万冊の図書」 11月2日(土)～

※本誌に掲載のスケジュール・展覧会タイトル・関連イベント等は予告なく変更される場合があります。最新の情報はホームページをご覧ください。

## ご利用案内

- 休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日・振替休日の場合はその翌日)、年末年始(12月29日～2014年1月1日)
  - 開館時間：10:00～18:00(木・金は20:00まで)、2014年1月2日・3日は11:00～18:00 入館は開館の30分前まで
- 2014年1月2日・3日は年始特別開館・イベント等の詳細は決定次第ホームページで発表します。

## 割引チケットの販売

3展示をすべて鑑賞できる「セット券」、2展示を選べる「チョイス券」を販売しております。  
詳しくはチケット売り場でおたずねください。



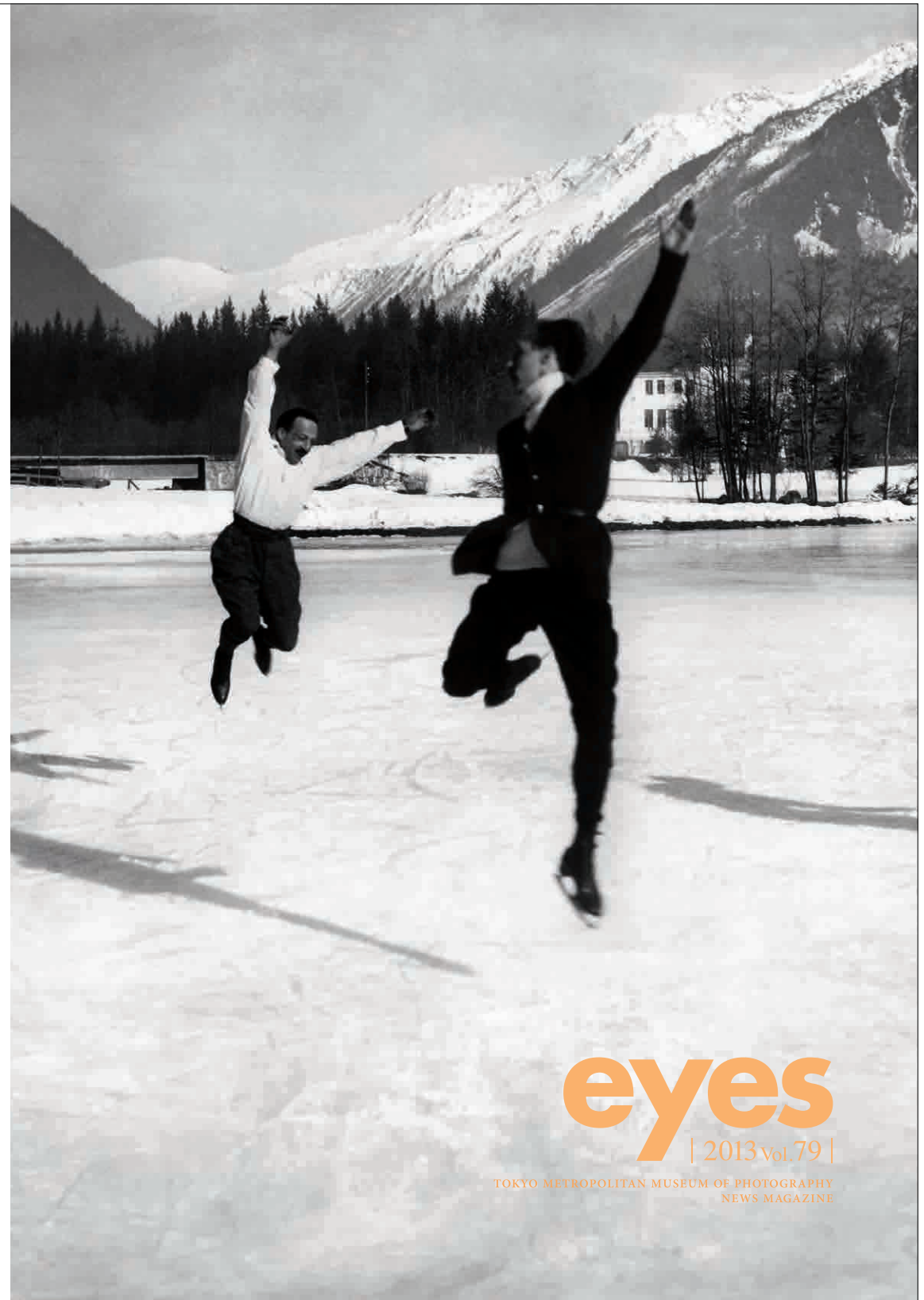
## 東京都写真美術館

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3  
恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099  
<http://www.syabi.com>

JR恵比寿駅東口より徒歩約7分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場を御利用ください。

※本誌編集ページに掲載されている観覧料および商品の価格は、原則として消費税込みの価格です。

東京都写真美術館ニュース「アイズ13」79号 ●発行日：2013年9月27日 / 企画・編集：東京都写真美術館事業企画課 普及係  
●印刷・製本：TB印刷株式会社 ●発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 ©2013 ●本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。



eyes  
| 2013 Vol.79 |

TOKYO METROPOLITAN MUSEUM OF PHOTOGRAPHY  
NEWS MAGAZINE

Ueda and Lartigue shared a lifelong delight in the essence of amateur photography, the sheer joy of taking photographs. Their works transcend differences between Japanese and French cultures and pose the same question: What, after all, is the human significance of photography? This exhibition is more than a retrospective devoted to the work of two photographers, both individually and in relation to each other, asking how much is unique and yet representative of the times in which it was taken.

# Ueda Shoji & Jacques Henri Lartigue

## TOPICS 植田正治とジャック・アンリ・ラルティエグ — 写真であそぶ —

Ueda Shoji & Jacques Henri Lartigue



植田正治 後ろ向きの少女 1949年

植田正治とジャック・アンリ・ラルティエグは、日本とフランスそれぞれを代表する「偉大なるアマチュア写真家」。2010年に開催された「木村伊兵衛とアンリ・カルティエ・ブレッソン 東洋と西洋のまなざし」展に続き、日仏の作家二人展の第二弾として企画されたのが本展である。アマチュアだからこそ純粋に、そして自由に制作された写真は、どれも屈託がなく、見る者の心をも幸せにする不思議な力を放っている。そんな二人の作家の魅力を展覧会企画者である、鈴木佳子、金子隆一の両学芸員にうかがった。

植田正治がラルティエグ作品の大ファンだったことが、今回の二人展が実現するきっかけになったそうですね。植田が憧れたラルティエグとはどんな写真家だったのですか？

鈴木「ラルティエグは1894年、フランスでも屈指の財閥の家系に生まれています。70歳を目前にした1963年に、ニューヨーク近代美術館で個展が開催されて初めて名が世に出るわけですが、それまで写真家としては全く知られていませんでした。繊細な性格だったようで、こどもの頃、大好きなママ、尊敬するパパ、強いお兄さん、仲の良い従兄弟たちと過ごす毎日がとても幸せで、その一瞬一瞬が失われていくことが耐えられずに、思い悩んでしまった。このままではいけないと父親がカメラを買い与えたことが、写真を始めるきっかけになったそうです。その頃から幸せな出来事一つももらすまいと、生涯を通して日々写真を撮り、日記やアルバムにまとめていくわけです」

では、写真で作品を作っているという意識はなかったのですか？

鈴木「ラルティエグはインタビューでも、有名な写真家の名前をほとんど知らないと答えています。写真はあくまでも、自分の楽しみのためだけに撮っていたんですね。その彼のアルバムを見ていくと、別荘でプールに入ったりテニスをしたり、映画スターやスポーツ選手との華やかな交流も出てきたりと、まるでおとぎ話のような人生が続きますが、他の登場人物たちと一緒に写る本人はとても静かな表情で、強烈さがない。実際には苦悩を抱えてもいたし、晩年にいたるまで落ち着いた気持ちになることが難しかったと、関係者には漏らしたこともあったそうです」



ジャック・アンリ・ラルティエグ 女優のアレット、犬の名はシシとゴゴ。役名からラ・ブラドヴィナと呼ばれる 1911年1月15日 Photographie J H Lartigue (c) Ministère de la Culture - France / AAJHL



植田正治 「綴り方・私の家族」より パパとママと子どもたち (I) 1949年



ジャック・アンリ・ラルティエグ 1904年 コルタンペール通り40番地 JHLのプロペラ式水上滑走艇 Photographie J H Lartigue (c) Ministère de la Culture - France / AAJHL

植田正治のほうがアマチュアということにより意識的だったのでしょうか。

金子「彼は、「生涯アマチュア写真家」「アマチュア精神」という言葉に非常にこだわっていました。60年代末から70年代はじめに、商業や広告、報道を目的とはせず純粋に写真表現を行う写真家を「シリアスフォトグラファー」と呼ぶ言い方が出てくるんですが、植田正治はそれに対応する考え方として「アマチュア」という言葉を頻繁に使うようになります。職業写真家ではないからこそ、自由な表現が可能なんだという意味も含まれているのかもしれませんが、彼はそんなふうにして、自分の写真家としての生き方を位置づけようとしたんですね」

鈴木「植田はその当時、雑誌「カメラ毎日」の山岸章二編集長と懇意にしていたそうですが、その山岸編集長のところに夜中でも電話をかけて、新しい写真について意見を聞きたいと言って、何時間でも話をしていた

そうです。

家族にだって都合はあるだろうし、子どもたちも遊びに連れて行ってほしい気持ちもあったかもしれませんが、そんなことはおかまいなしに、鳥取砂丘に連れて行っては、ポーズを撮らせて、納得のいくまで撮影を続けたわけですね」金子「ラルティエグの写真は、いわゆる家族アルバムの写真と言えます。一方、植田正治の娘のカコさんは、うちには家族写真がないんですよとおっしゃっていた。みんな作品なんです、と。

ラルティエグと植田正治は同じアマチュアでも、写真の成り立ち方が全然違うんですね。植田正治は、そうやって写真で作品をつくるのが日常でしたが、かたやラルティエグは日常が写真になっていった」

鈴木「そして、対極ではありながらも、どちらも非常に好奇心旺盛で、写真の新しい表現を追求することにはほとんど欲でした。

ラルティエグは、1900年前後、写真撮影で面白いのは瞬間を撮ることだと、とても早い段階で悟って、それを実現させようと様々な試みをしていきました。技術的にはシャッタースピードが今よりもずっと長く時間がかかっていた時代です。乳母にボールを投げさせて撮った作品（「ばくの乳母デュデュ、パリ」1904年）は、まだ少年時代のもので、これは最初期に彼が撮った、瞬間的な表現を試みた写真のひとつです。

さらにラルティエグの写真はすごくスピードが感じられるものが多い。家族で自動車レースを見に行くとか、兄が飛行機に乗ることを趣味としていたこともあって、



植田正治 風船を持った自画像 (II) 1948年頃



植田正治 「風景の光景」より 1970-80年



ジャック・アンリ・ラルティエグ  
ピビとマン、オンフルール 1922年6月  
Photographie J H Lartigue (c) Ministère de la Culture - France / AAJHL

ラルティエグはそれらを撮ることに熱中して、独自にテクニックを身につけていきました。写真史を知らないと言いながらも、写真の動向を先取りして、優れた作品を数多く制作しているんです」

**植田正治は、あらかじめ演出してから撮影した作品が印象的です。**

金子「植田正治の写真は人間を撮っていても、人として撮るんじゃなくてオブジェとして撮っているとよく言われます。砂丘のシリーズはまさにその典型ですね。彼は、写真の中に自分の生活すべてをはめ込んでいった。だから家族はオブジェのように見えるんじゃないかと思えます。また、アマチュア写真家として、生涯、故郷の山陰地方に生きることにこだわっていました」

**自由に写真制作に没頭していたからこそ、それぞれの生き方が、作品にも反映されているのですね。では、二人の作品に共通する魅力とは何でしょうか？**

金子「ラルティエグと植田正治の作品は、こどもでも分

かる写真だと思います。写真は記録道具ではありますが、彼らにとっては遊び道具であり、写真を撮ることが遊びとしてあった。つまり、こどもが撮るように、純粹で自由な気持ちで写真にむかっていたんです。だから、こどもの心を持たずに見ると、面白さが半減してしまうかもしれないですね。内容に理由をもとめたら魅力が分からなくなってしまう」

**今回の二人展は、見る側の純粹さが試される展覧会ということになりますか(笑)。**

金子「この展覧会がどれだけ楽しめるかは、どれだけ自分の心が自由であるかにかかっていると(笑)。これは冗談だとしても、とにかくこの二人の作品は理屈ぬぎに楽しい写真が多いので、美術館だからといった気構えや難しいうんちくは抜きにして、気楽に楽しんでいただけたら企画者としてこれ以上の幸せはありません」

(2013年8月インタビュー) 構成=富田秋子



ジャック・アンリ・ラルティエグ シャモニー、  
1918年1月8日 ※表紙は部分  
Photographie J H Lartigue  
(c) Ministère de la Culture - France / AAJHL

3F

3階展示室 Exhibition Gallery

友の会割引 | 三越カード割引 | アトレビューSuicaカード割引  
11月23日(土)祝 → 2014年1月26日(日)  
2014年1月2日・3日は年始特別開館

## 植田正治とジャック・アンリ・ラルティエグ —写真であそぶ—

一般 700(560)円  学生 600(480)円  中高生・65歳以上 500(400)円

( )は20名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金  
※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

主催:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/朝日新聞社  特別協力:ジャック・アンリ・ラルティエグ財団  協賛:東京都写真美術館支援委員会  後援:在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本

生まれ育った鳥取県境港市を拠点に70年近くにわたって写真活動を行い、その前衛的な作風で広告・ファッション界からも注目された植田正治(1913-2000)。20世紀初頭のフランスに生まれ、独創的な視点と描写で写真表現の可能性を切り拓いたジャック・アンリ・ラルティエグ(1894-1986)。生涯アマチュア精神を貫き、写真を撮ることを純粹に楽しんだ彼らの作品は、日本とフランスという文化や時代背景の違いを超えて、「人間にとって写真とはいったい何なのか」と

いう根源的な問いを私たちに投げかけています。本展は、フランスのジャック・アンリ・ラルティエグ財団との共同企画により、ラルティエグが没後フランスに遺した豊富なコレクションと、当館が重点的に収集した植田のコレクションから選りすぐった約160点を展示。偉大な写真家たちの業績を回顧するだけではなく、二人の作品が、近代写真表現の成熟期においていかに独特であったか、いかに時代性を捉えていたかを、個別的かつ相対的に問う初めての試みです。

☒ 担当学芸員によるフロアレクチャー 第1・3金曜日 16:00~  
※本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

☒ 展覧会関連イベント  
※詳細につきましては決定次第ホームページでお知らせします。

2F

2階展示室 Exhibition Gallery

友の会無料 | 三越カード割引 | アトレビュー-Suicaカード割引

9月28日(土) → 12月1日(日)

なぎのひら  
須田一政 風の片 Suda Issei *nagi no hira - fragments of calm*

一般 600(480)円  学生 500(400)円  中高生・65歳以上 400(320)円

( )は20名以上の団体、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金 ※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※東京都写真美術館友の会会員は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

主催：東京都 東京都写真美術館/産経新聞社  後援：サンケイスポーツ/夕刊フジ/フジサンケイビジネスアイ/izal/SANKEI EXPRESS  協賛：株式会社ニコン/株式会社ニコンイメージングジャパン  協力：富士フィルムイメージングシステムズ株式会社



担当学芸員によるフロアレクチャー 第1・3金曜日 14:00~

※本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

関連イベント

作家とゲストによる連続対談。各回とも15:00~17:00開催

①10月5日(土) ゲスト：鈴木一誌(ブックデザイナー)

②11月2日(土) ゲスト：鈴木理策(写真家)

会場：東京都写真美術館 1階アトリエ  定員：約70名

※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます

※当日10時より当館1階受付にて整理券を配布いたします。番号順入場、自由席

※開場14:45(予定)

現実の裂け目から異空間を覗き見るような写真表現で、1970年代から国内のみならず、オーストリアやニューヨークでも紹介され、国際的な評価を得ている須田一政。1940年、東京・神田に生まれた須田は、1960年代から洒脱な視点と卓越した技術で人間、生活、街などの裏側へと視線を誘うような写真群を発表し、1967年から1970年までは寺山修司主宰の演劇実験室「天井桟敷」の専属カメラマンとして活動してきました。本展は、新規重点収集作家として当館が収集し続けてきた須田の代表作『風姿花伝』『物草拾遺』『東京景』に加えて初期作品『紅い花』『恐山へ』を展示するとともに、写真家生活50周年を迎える本年発表の最新作『風の片』を初公開。「風(なぎ)」という風が止まる時間特有の感触に似た、日常と非日常を往還するような作家の視線が、一片(ひとひら)の写真となって降り積もっているかのような展覧会です。今はなぎ風景や人物、昭和から現在へと引き継がれる日本の風俗を特異な視点で切り取る須田一政の写真表現を、215点におよぶ精緻な銀塩プリントでご堪能ください。

〈風姿花伝〉より〈山形・銀山温泉〉、1976年、ゼラチン・シルバー・プリント、東京都写真美術館蔵

B1F

地下1階展示室 Exhibition Gallery

10月26日(土) → 11月17日(日)

写真新世紀 東京展 2013 New Cosmos of Photography Tokyo Exhibition 2013

入場無料  主催：キャノン株式会社  共催：東京都写真美術館

キャノンが文化支援活動の一環として行っている「写真新世紀」は、1991年に公募をスタートして以来、これまでに国内外で活躍する優秀な写真家を多数輩出、新人写真家の登竜門として広く知られています。今年は第36回目の公募を実施、応募者1,114名の中から厳正な審査を経て、優秀賞5名と佳作19名が選ばれました。「写真新世紀 東京展 2013」では、それら受賞作品を展示するほか、昨年のグランプリ受賞者である原田要介氏の新作個展「見るになる」もご紹介します。フレッシュで力強い受賞作品の数々をお楽しみください。



◎お問い合わせ》キャノン(株)写真新世紀事務局 03-5482-3904 ◎ホームページ：canon.jp/scsa/

原田要介 新作個展「見るになる」より

B1F

地下1階展示室 Exhibition Gallery

友の会割引 | 三越カード割引 | アトレビュー-Suicaカード割引

8月10日(土) → 10月20日(日)

岩合光昭 写真展 ネコライオン

一般 800(640)円  学生 700(560)円  中高生・65歳以上 600(480)円

( )は20名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金 ※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

主催：クレヴィス  共催：東京都写真美術館  協賛：オリンパス株式会社



地球上のあらゆるフィールドで大自然と野生動物を撮り続ける一方、私たちの身近に暮らすイヌやネコの写真で多くの人を魅了する動物写真家・岩合光昭。本展は、岩合が捉えた人間と共生するネコ、野生に生きるライオンを約180点の作品で展覧。彼らの共通点や差異を感じることで、私たち人間が忘れてしまった“野生”を浮き彫りにします。

ネコ：オーストラリア アデレード近郊

ライオン：タンザニア ンゴロンゴロ自然保護区

(c) Mitsuki Iwago

◎お問い合わせ》クレヴィス 03-6427-2806

展覧会関連イベント

岩合光昭によるアーティストトーク

2013年9月28日(土)、29日(日)、10月5日(土) 各日11:00~と15:00~  
本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、展示室にお集まりください。

地下1階展示室

入場無料

11月23日(土)・24日(日)

第14回上野彦馬賞 九州産業大学フォトコンテスト受賞作品展

21世紀に羽ばたく若い写真家の発掘と育成を目的とし、わが国の“写真の祖”として尊敬されている「上野彦馬」の名を冠した「上野彦馬賞-九州産業大学フォトコンテスト」。9月13日まで募集された作品から、入賞した作品をご紹介します。展覧会です。

主催：九州産業大学/毎日新聞社

◎お問い合わせ》毎日新聞福岡本部事業部 092-781-3636

『写真のエッセイ』 平成25年度東京都写真美術館コレクション展

# コスモスー写された自然の形象

## Cosmos-Natural Phenomena in Photographs

3階展示室

9月21日(土) - 11月17日(日)

当館では写真の黎明期から現代作家の作品まで約2万9,000点を超える収蔵作品から、毎年テーマを設けてコレクション展を開催しています。本展は“写真の美しさはどこにある?”をテーマに、「写された対象物の美しさ」に着目。森羅万象を区分する「木」「火」「土」「金」「水」の5つの元素を手がかりに、自然の美、イメージ、心性など、人々の営みや経験から導かれる美しさを提示していきます。

写真に切り取られた「自然」。それはあるがままの自然ではなく、写真家の眼によって捉えられた瞬間が、さまざまな行為をとおして呈示された、いわば「作られた自然」です。心象風景の投影として自然を表現すれば、すべての事象は写真家の意図を表現するための手段となります。また鑑賞者も、忠実に再現された自然に美を見いだすこともあれば、写真家の意図を理解することで新たな発見をし、自らの心性を重ねることで深遠なものを感じることもあるでしょう。本展では当館の収蔵作品より選りすぐった約120点を展示、その約7割が初公開となります。国内外の著名作家の作品が一堂に会するコレクション展は、写真に表現された美しさをひもとく道標となることでしょう。

### ≫主な出品作家

緑川洋一、水越武、秋山庄太郎、鈴木理策、石元泰博、高梨豊、土田ヒロミ、林忠彦、榮榮&映里、ジェリー・N、ユルズマン、野町和嘉、清水武甲、師岡宏次、芳賀日出男、木村伊兵衛、内藤正敏、アンセル・アダムス、ジャンルー・シーフ、柴田敏雄、W. ユージン・スミス、白井茂信、奈良原一高、篠山紀信、中村征夫ほか

友の会無料 | 三越カード割引 | アトレビューSuicaカード割引  
一般 500 (400) 円 / 学生 400 (320) 円 / 中高生・65歳以上 250 (200) 円

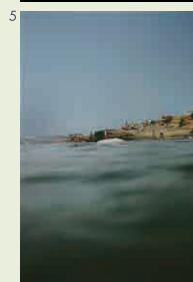
( )は20名以上の団体、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金 ※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※東京都写真美術館友の会会員は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

□主催：東京都 東京都写真美術館 □協賛：凸版印刷株式会社

### 展示をより楽しむためのキーワード

対象物にいだくイメージは人それぞれに異なります。展示会担当学芸員が考える5つの元素をひもとくキーワードを一部ご紹介します。

- ☒ 神の依り代、成長、歴史の傍観者、心のよりどころ
- ☒ 創造と破壊、灯り、温もり、祭り、生命力
- ☒ 作物、豊穡、結末、境界、地表
- ☒ 産業、武器、圧力、錬金術
- ☒ 潤い、生命の源、浄化、反射、別世界 など



## Cosmos-Natural Phenomena in Photographs

1. 内藤正敏 <遠野物語>より <ダンノハナ(佐々木喜善の墓より山口集落の生家を望む)> 1972年
2. 緑川洋一 <日本列島>より <羽黒山千年杉> 1966年
3. 水越武 <日本の原生林>より <宮城県、船形山、ブナ> 1990年
4. 奈良原一高 <ジャパネスク>より <刀#1 平井松葉刀研師(東京都港区)> 1968年
5. 橋本朝子 <half awake and half asleep in the water>より <JOGASHIMA> 2000年
6. 榮榮&映里 <Untitled no.25 2008> 2008年 7. 畠山直哉 <Slow Glass/Tokyo #066> 2006年
8. 清水武甲 <ハヤを焼く> 昭和(戦後)



☒ 担当学芸員によるフロアレクチャー 第2・4金曜日 14:00~ ※本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

### ☒ 展示会関連ワークショップ

#### こどものための鑑賞プログラム

学芸員と一緒に、展示作品に写っているものをじっくり見て思ったことを自由に対話しながら、楽しく作品を鑑賞します。鑑賞の後には、ちいさな作品の制作体験も行います。芸術の秋、子どもたちの美術館デビューにもぴったりです。(参加対象 小学3年生から6年生とその保護者)

□日時：2013年10月19日(土)、20日(日) 各日10:30-12:00  
□申込締切：2013年10月1日(火) 12:00必着  
※参加費、お申込み方法など最新情報はホームページをご覧ください。



# Contemporary Japanese Photography vol.12: every stroller can change the world.

日本の新進作家 VOL.12

## 路上から世界を変えていく

2階展示室

12月7日(土) - 2014年1月26日(日) 2014年1月2日・3日は年始特別開館

当館は、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘し、新しい創造活動の場となるよう、様々な事業を展開しています。その中核となるのが、毎年異なるテーマを決めて開催している「日本の新進作家」展です。シリーズ第12回目となる本展は「路上から世界を変えていく」をテーマとして、世界と向かい合う行為を象徴する「路上」という場所に焦点をあて、2010年代日本の新たな視点や表現を切り開く写真家たちをとりあげていきます。

写真の歴史上、多くの写真家たちが「路上」を舞台としてストリート写真という形で優れた作品を生み出してきました。「路上」は現実と対峙する場であり、偶然性や思いがけない出会いの場として、様々な芸術家たちを魅了してきました。

「路上から世界を変えていく」。本展の出品作家たちは、たんに路上で撮影をするだけでなく、「路上」という日常の場所から出発して、今という時代についての考察を行い、自身の立ち位置を模索し、視覚作品という形で、見るものの世界観やものの見方、感じ方を変えていくような意志と契機をはらんだ創作行為を行っています。「路上」というキーワードから現代作家たちをとりあげることで、現代写真表現と過去の写真／美術の歴史との間のつながりや隔たりを浮き彫りにし、この時代の空気感や意識の在り様を顕在化させることが本展の大きな狙いのひとつとなります。

友の会割引 | 三越カード割引 | アトレビューSuicaカード割引

一般 700 (560) 円 / 学生 600 (480) 円 /  
中高生・65歳以上 500 (400) 円

( )は20名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金 ※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

□ 主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 / 東京新聞 □ 協賛：凸版印刷株式会社 / 東京都写真美術館支援会員 ほか



大森克己「すべては初めて起こる」より  
福島県福島市 2011

### 大森克己

1963年兵庫県生まれ。94年ロックバンド・マノネグラの中南米ツアーに取材した《Good Trips, Bad Trips》で第9回写真新世紀優秀賞。以降、写真集での作品発表をはじめ、海外を含めた各地での個展多数。2011年、桜に導かれた東京から福島への旅において撮影・制作された作品「すべては初めて起こる」を発表。

### ❖ 展覧会関連イベント

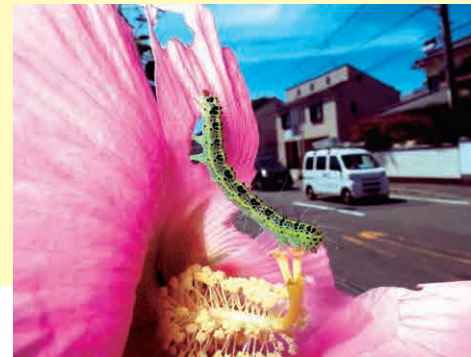
※詳細につきましては決定次第ホームページでお知らせします。

### ❖ 担当学芸員によるフロアレクチャー

第2・4金曜日 14:00~  
※本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

### 糸崎公朗

1965年長野県生まれ。赤瀬川原平らが実践した80年代の路上観察学の流れを汲み、「非人称芸術」という独自の概念を唱える。90年代より「非人称芸術」の物件写真を立体物に組み立てた「フォトモ」を制作発表。高松市美術館、静岡市美術館他での個展、グループ展、ワークショップ多数。2003年第19回東川賞新人作家賞。



糸崎公朗「路上ネイチャー協会」より 2012



林ナツミ Today's Levitation 02/21/2011 (参考図版)

### 林ナツミ

1982年埼玉県生まれ。2005年立教大学文学部卒業。2007年立教大学大学院コミュニティ福祉学研究所博士課程前期課程修了。2011年1月より自身のウェブサイト「よわよわかメラウマン日記」<http://yowayowacamera.com/>にて、浮遊セルフポートレート日記「本日の浮遊」を公開。この作品は、住宅街の路地や駅のホーム、繁華街にできた空き地や食堂の中など、さまざまな場所で浮遊する自分自身を捉えた写真シリーズである。2012年東京・恵比寿の現代美術ギャラリーMEMにて個展。同年、写真集「本日の浮遊」(青幻舎)を刊行。2013年青山・スパイラルガーデンにて個展、6x9mの巨大プリントを展示。



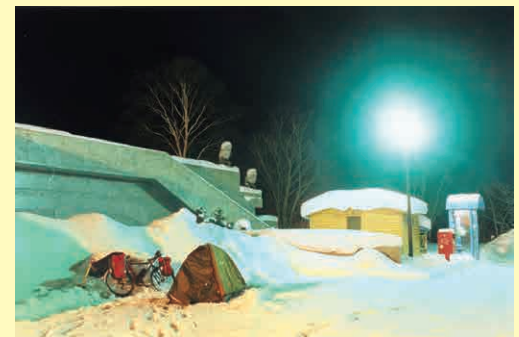
鍛冶谷直記「JPEG」2002-2013より amiten

### 鍛冶谷直記

1970年兵庫県生まれ。2002年第25回写真新世紀優秀賞。08年グループ展「Heavy Light—Recent Photography and Video from Japan」展 (International Center of Photography, New York) に出品。裏通りや歓楽街の看板やチラシ、装飾など、全国各地の地方都市で撮影した風景の断片からなるシリーズ「JPEG」を手がける。

### 津田隆志

1983年愛知県生まれ。08-11年名古屋で映像を使ったインスタレーション作品をメインに制作・発表を行う。11年末より写真を中心として、独自の視点から現代社会と都市空間を解読する作品を発表している。全国各地を旅して人に尋ねた「あなたがテントを張れそうだと思う場所に」に宿泊し、その場所を記録した写真シリーズ「site」を2012年に発表。(個展、ニコサロンbis新宿、他。)



津田隆志「site」より 2012

Takatani Shiro Camera Lucida

# 高谷史郎 明るい部屋

地下1階展示室

12月10日(火) - 2014年1月26日(日) 2014年1月2日・3日は年始特別開館

高谷史郎は、国際的な芸術家集団ダムタイプの芸術監督として、パフォーマンスやインスタレーションの制作に携わり、映像、照明、グラフィックや舞台装置デザイン等を幅広く手がけてきました。個人の活動では、映像作家として、自然環境や科学現象への深い洞察に基づく作品や、音楽家や多ジャンルのアーティストと協働で作品を制作し、とりわけ近年では、光学的な関心から写真シリーズを発表しています。

1984年に、京都で美術、デザイン、建築、音楽、ダンス等の異なる領域のメンバーによって結成されたダムタイプは、しばしば「マルチメディア・アート・パフォーマンス・グループ」と称されるように、パフォーマンス、インスタレーション、出版物などの多様なメディアを通して、とりわけ「ワーク・イン・プログレス(進行中の作品)」という手法をとりながら、芸術と社会との接点を探る作品群を、世界各地で発表し、時代を牽引してきました。

高谷が、個人の活動で発表してきた映像作品やインスタレーション、パフォーマンスの多くが様々な領域との協働作品であるのも、ダムタイプの活動や思想に裏付けされていると言っても過言ではありません。高谷は、制作過程のなかから、それまでは作品の中心ではなかった、メディア・テクノロジーや先端的なシステムに早い段階から注目し、デジタル時代における新たなメディア表現の可能性を提示してきました。

本展覧会タイトルである「明るい部屋」とは、哲学者ロラン・バルトによって1980年に書かれた写真論の題名であ

り、画家が風景を手元の紙の上に映し出すために用いた光学装置カメラ・ルシダ(camera lucida、ラテン語)を意味しています。カメラ・ルシダは、今日のカメラの原型とも呼ばれる「暗い部屋(暗箱)」=カメラ・オブスクラ(camera obscura)が、針穴(ピンホール)から入ってくる外光によって倒立像を投影するのは異なり、「カメラ」(部屋、箱)と呼べる部分を持たず、プリズムとレンズだけで目の前にある対象物をうつしだします。「写真ができる(像が結ばれて定着する)過程は暗箱というブラックボックスの中で起こっているけれども、すべてを明るきものにさらすような、そんな構造の舞台をつくってみたい」として、高谷はパフォーマンス「明るい部屋」を2008年に発表します。舞台そのものをカメラ・ルシダの装置にすることで、高谷はバルトが考えた写真というものに近づこうとしました。

バルトは、その写真の本質を、「それは=かつて=あった」という実在の関わりに見出しています。絵画は対象を模倣することができますが対象そのものをうつしだすことはできません。しかし、写真は対象そのものをうつしだし、それ自体が関わる記憶や存在といったものを、観る者に想起させます。高谷にとって、写真は、イメージが形成されていく上で、あらゆるメディア表現の原点として存在しているのです。本展は、高谷の幅広い活動を紹介する待望の美術館初個展です。インスタレーションとして制作された《Camera Lucida》(2004)、初公開の新作《Toposcan》のほか、当館のコレクション作品で、高谷の活動の原点となる写真映像の歴史を検証します。

友の会無料 | 三越カード割引 | アトレビューSuicaカード割引

一般 500 (400) 円 / 学生 400 (320) 円 / 中高生・65歳以上 250 (200) 円

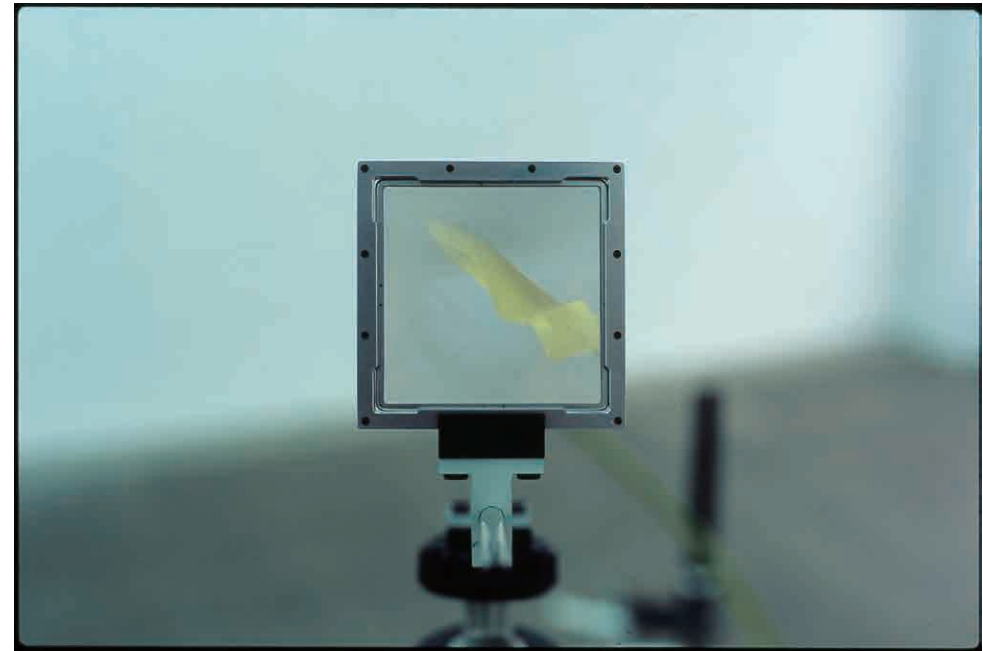
( )は20名以上の団体、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金 ※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料※東京都写真美術館友の会会員は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

□主催：東京都 東京都写真美術館 / 産経新聞社 □協賛：凸版印刷株式会社 □後援：サンケイスポーツ / タ刊フジ / フジサンケイビジネスアイ / iza! / SANKEI EXPRESS

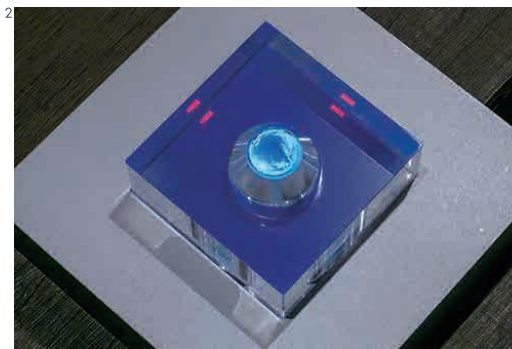
## ▶▶ 出品予定作品

インスタレーション作品《Camera Lucida》(2004)、《Chrono》(2006)、《Toposcan》(新作) 他

カメラ・ルシダ 19世紀(参考図版)



高谷史郎《Camera Lucida》2004年



## 高谷史郎 profile

1963年生まれ。京都市立芸術大学美術学部環境デザイン科卒。1984年より「ダムタイプ」の活動に参加。主な個人の活動としては、1999年 坂本龍一オペラ《LIFE》の映像ディレクション。インスタレーション《frost frames》(1998)、《optical flat》(2000/国立国際美術館蔵)。2001年 霧の彫刻家・中谷芙二子との共同制作インスタレーション《IRIS》をバレンシア・ビエンナーレ(スペイン)にて発表。2005年 ラトビア国立自然史博物館で開催された「雪と氷との対話」展に参加。2006年日豪交流プロジェクトでオーストラリアに滞在、《Chrono》を制作・発表。2007年 坂本龍一との共同制作インスタレーション《LIFE - fluid, invisible, inaudible...》(YCAM)。気候変動について考えるための北極圏遠征プロジェクトCape Farewell(イギリス)に参加。2008年 パフォーマンス《Die Helle Kammer(明るい部屋)》をTheater der Welt(ドイツ)にて初演。2010年 中谷芙二子との共作《CLOUD FOREST》(YCAM)。2011年 渡邊守章演出《マラルメ・プロジェクトII》(京都芸術劇場 春秋座)映像・美術を担当。2012年 パフォーマンス《CHROMA(クロマ)》をびわ湖ホールにて初演。「吉左衛門X:高谷史郎・音/映像+楽吉左衛門・茶碗」(佐川美術館)。2013年 シャルジャ・ビエンナーレ(U.A.E.)等。

## ❖ 展覧会関連イベント【特別アーティストトーク】

□日時：2014年1月3日(金) 16:00~17:30

□会場：1階ホール(定員190名)

□出演：坂本龍一(音楽家)×浅田彰(批評家)×高谷史郎(出品作家)

※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。

※当日10時より1階受付で整理券を配布します。番号順入場、自由席。

## ❖ 担当学芸員によるフロアレクチャー 第2・4金曜日 16:00~

※本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

1. 高谷史郎 パフォーマンス《明るい部屋》2012年 撮影：福永一夫

2. 高谷史郎《Chrono》2006年 写真撮影：島山崇

Film 『ドキュメンタリー映画「もったいない!」』

食料廃棄の真実を描いた驚愕のドキュメンタリーが遂に日本公開!

私たちが日々食べる食品は、そのおよそ3〜5割が食卓に届く前に捨てられています。生産の現場で、流通の過程で、小売販売の段階で、そして家庭でも……。世界各国で食料のあらゆるプロセスに関わる人々や専門家の話を聞きながら、その現実と原因、影響を目撃し、私たちに何ができるのかを探る、驚愕のドキュメンタリーが遂に日本公開。



© SCHNITTSTELLE Film Köln, THURN FILM

T&Kレフィルム 03-3486-6881 ○上映スケジュール: 9月21日(土)〜10月11日(金) ○料金: [当日券]一般1,800円、学生1,500円、シニア・中学生以下・障害者手帳をお持ちの方1,000円 ○休映日: 毎週月曜日(祝日・振替休日の場合は翌日) ○上映時間: 10:30/13:00/15:00 【映画公式ホームページ】 http://www.mottainai-eiga.com

Film 『天のしずく“辰巳芳子 いのちのスープ”』

食すということを通して、人間としてのあり方や尊厳を探ります。

3.11以降の日本で、私たちはどうやって生きていくのか。日本人にとって今、いちばん大切なこととは何なのか。私たちが目指すべき生き方、人間としてのあり方を、食べものをつくり、食すことを入口に考える料理研究家・辰巳芳子。その真摯な暮らしや取り組みを追いながら、農と食を通じて人の命の尊厳を考え直す珠玉のドキュメンタリー。



© 天のしずく制作委員会

環境テレビラスト 03-3352-0680 ○上映スケジュール: 2013年11月9日(土)〜 ○休映日: 毎週月曜日(祝日・振替休日の場合は翌日) ○上映時間: 未定 ○料金: [当日券] 未定 【映画公式ホームページ】 http://tennoshizuku.com/ ※上映スケジュール等、決定し次第ホームページにてお知らせします。

1F ミュージアムショップ『ナディッフ バイテン』 r CAFÉ BIS (カフェ・ビス)』

【営業時間】 ◎ナディッフ バイテン/10:00-18:00(木・金は20:00、土は18:30) 【お問い合わせ】Tel.03-3280-3279 ◎CAFÉ BIS/11:00-18:00(ラストオーダー17:30) 【お問い合わせ】Tel.03-6721-7474

開催中の展覧会に合わせて、須田一政、ジャック・アンリ・ラルティアグ等の貴重な古書を入荷しています。



価格、タイトル等はショップへお問い合わせください。

ジンジャーがふんわり香る生地とレモン味のアイシング。紅茶との組み合わせがぴったりです。



レモンジンジャーブレッド 420円(税込)

友の会 Support 展覧会のご招待・割引、1階ホールの上映映画や関連施設の割引などを多数ご用意して、皆様のご入会をお待ちしております。

年会費 個人会員 2,000円 家族会員(同伴者1名まで) 3,000円 シルバー会員(65歳以上の方) 1,000円

※受付は当館1階チケットカウンター横の「友の会カウンター」のみとなっております。 ※会員証の有効期限等、詳細は当美術館までお問い合わせください。 Tel.03-3280-0099(開館時間中)

Table with columns: 友の会特典, 特典内容, 収蔵展・映像展, 無料, 企画展・誘致展, 割引, ミュージアムショップ, 5%引き, その他

支援会員 Corporate Members

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

- 特別賛助会員: キヤノン(株), カルピス(株), ニコン(株), キヤノンマーケティングジャパン(株), 大日本印刷(株), 凸版印刷(株), 富士フイルム(株), リコー(株), I&S BBDO(株), AOI Pro.(株), アサツー ディ・ケイ(株), 旭化成(株), 朝日新聞社(株), 朝日新聞出版(株), 朝日生命保険(相), アサヒグループホールディングス(株), 朝日放送(株), アスカル(株), アートよみうり(株), アマナホールディングス(株), 岩波書店(株), ウェスティンホテル東京(株), 潮出版社(株), 内田写真(株), 栄光社(株), エスジー(株), ADKアーツ(株), NECディスプレイソリューションズ(株), NHKアート(株), NHK営業サービス(株), NHKエデュケーション(株), NHKエンタープライズ(株), NHKグローバルメディアサービス(株), NHK出版(株), NHKビジネスクリエイト(株), NHKプロモーション(株), NHKメディアテクノロジー(株), NTTデータ(株), NTT都市開発(株), エプソン販売(株), エルメス財団(株), オリックス(株), オリオンバス(株), オンワードホールディングス(株), 科研製薬(株), カンオ計算機(株), 鹿島建設(株), 角川グループホールディングス(株), カトーレック(株), 神奈川新聞社(株), カルピス(株), キクチ科学研究所(株), キッコーマン(株), キタムラ(株), キヤノンマーケティングジャパン(株), 共同印刷(株), 一般社団法人共同通信社(株), 協和発酵キリン(株), 興亜硝子(株), 弘亜社(株), 廣済堂(株), 講談社(株), 光文社(株), 国書刊行会(株), コスモインスターナショナル(株), コーセー(株), コダック(株), 小山登美夫ギャラリー(株), ザ・アール(株), サッポロ不動産開発(株), サッポロホールディングス(株), 三機工業(株), 産経新聞社(株), サントリーホールディングス(株), サンライズ(株), サンローゼ(株), ジェイアール東日本企画(株), JSR(株), 東亜建設工業(株), 東急建設(株), 東京海上日動火災保険(株), 東京急行電鉄(株), 東京工芸大学(株), 東京新聞・中日新聞社(株), 東京スタディオ(株), 東京造形大学(株), 東京総合写真専門学校(株), 東京テアトル(株), 東京都競馬(株), 東京ドーム(株), 東京ニュース通信社(株), 東京美術倶楽部(株), 東京ビジュアルアーツ(株), 東京外ロボリタンテレビジョン(株), 東芝(株), 東宝(株), 東北新社(株), 東洋経済新報社(株), 東洋熱工業(株), 徳間書店(株), 戸田建設(株), トータルプランニングオフィス(株), 成美製版(株), 全日本空輸(株), ソニー(株), 第一生命保険(株), 第一法規(株), ダイケングループ(株), 大成建設(株), 大丸松坂屋百貨店(株), タカ・インシキヤラリー(株), 高砂熱学工業(株), 高島屋(株), 宝島社(株), 竹中工務店(株), 玉川大学芸術学部(株), タムロン(株), 丹青社(株), コスモインスターナショナル(株), 中外製薬(株), ツァイト・フォト(株), 帝人(株), ティー・ピー・オー(株), TBSテレビ(株), テー・オー・ダブリュー(株), デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム(株), テレビ朝日(株), テレビ東京(株), 電源開発(株), 電通(株), 電通テック(株), 東亜建設工業(株), 東急建設(株), 東京海上日動火災保険(株), 東京急行電鉄(株), 東京工芸大学(株), 東京新聞・中日新聞社(株), 東京スタディオ(株), 東京造形大学(株), 東京総合写真専門学校(株), 東京テアトル(株), 東京都競馬(株), 東京ドーム(株), 東京ニュース通信社(株), 東京美術倶楽部(株), 東京ビジュアルアーツ(株), 東京外ロボリタンテレビジョン(株), 東芝(株), 東宝(株), 東北新社(株), 東洋経済新報社(株), 東洋熱工業(株), 徳間書店(株), 戸田建設(株), トータルプランニングオフィス(株), トヨタ自動車(株), トロンマネージメント(株), ニコンイメージングジャパン(株), 日外アソシエーツ(株), 日油(株), 日活(株), 日経BP(株), 日産自動車(株), 日本カメラ社(株), 日本空港ビルディング(株), 日本経済新聞社(株), 日本興亜損害保険(株), 日本広告社(株), 日本広告業協会(株), 日本カメラ(株), 日本中央工業研究所(株), 日本写真印刷(株), 公益社団法人日本写真家協会(株), 公益社団法人日本写真協会(株), 日本写真芸術専門学校(株), 一般社団法人日本写真文化協会(株), 日本大学芸術学部(株), 日本たばこ産業(株), 日本テレビ放送網(株), ニッポン放送(株), 日本ロレックス(株), ニューアートディフュージョン(株), ノーリツ鋼機(株), 博報堂(株), 博報堂DYメディアパートナーズ(株), 博報堂プロダクツ(株), バス・コミュニケーションズ(株), ハースト婦人画報社(株), パナソニック(株), パラゴン(株), ハリミキ(株), ぴあ(株), ビービーメディア(株), 北海道写真の町東川町(株), 東日本旅客鉄道(株), 光写真印刷(株), 美術出版社(株), 日立製作所(株), 日立物流(株), ビックカメラ(株), ビデオプロモーション(株), ヒノキ新薬(株), ビラミッドフィルム(株), ファーストリテイリング(株), 富国生命保険(株), フジテレビジョン(株), 富士電機(株), 双葉社(株), プラザクリエイト(株), プリンスホテル(株), フレームマン(株), 文化工房(株), 文藝春秋(株), ベネッセホールディングス(株), ベルボン(株), 北海道新聞社(株), ホテルオークラ東京(株), 堀内カラー(株), 本田技研工業(株), 毎日新聞社(株), マガジンハウス(株), 日本広告社(株), マミヤ・デジタル・イメージング(株), 丸善(株), マンダム(株), 三井住友海上火災保険(株), 三井倉庫(株), 三井不動産(株), 三越伊勢丹 三越恵比寿店(株), 三菱地所(株), 三菱製紙(株), 三菱倉庫(株), 三菱電機(株), 三菱UFJ信託銀行(株), ミルボン(株), 武蔵大学(株), 明治安田生命保険(相), 森ビル(株), モルガン・スタンレーMUFG証券(株), ヤマトロジスティクス(株), ユサコ(株), USACO CORPORATION(株), 横河電機(株), 吉野工業所(株), ヨドバシカメラ(株), 読売新聞社(株), ライオン(株), ライカカメラジャパン(株), リコーイメージング(株), リュモンジャパン(株), モンブラン(株), 良品計画(株), ロボット(株), ワコウ・ワークス・オブ・アート(株), ワコール(株), ワッツ オプトケーター(株), その他1法人

(株)=株式会社、(相)=相互会社、(有)=有限会社、(学)=学校法人

(平成25年9月現在・五十音順)